
でいてくていぶ！

宮澤卯月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいてくていぶ！

【Zコード】

N3129W

【作者名】

富澤卯月

【あらすじ】

毎日を平穀に過ぐしたい高校生成富稜は、その願望の原因となつた兄の創設した『探偵部』のスカウト（？）にあい、見事入部しその夢をあっけなく壊される。普通の少年とちょっと変わった美少女四人+が織り成すアクションラブコメです。

「よつこ。まあ、座つて座つて、

田の前のロングヘアの女の子に席を勧められた。

ちょっと茶色がかつた髪。

「それで、どんな依頼？」

「え……？」

「言い難い話かな？ 大丈夫。レコーダーとかで記録したりしないからさ。ね？」

顔を伏せていると、満面の笑みを浮かべて俺の顔を覗き込んでき

た。

ちょ、顔近いって……。

甘い香りが鼻腔をくすぐる。

やばい、この娘かなり可愛いんじゃないのか？

「あ、もう来てたのか」

後ろのドアが開くと同時に黒髪のポニーテールの少女が姿を現し

た。

この娘もかなり可愛い。

凛とした声が部屋に響く。

「ん？ 飛鳥^{あすか}、どうしたの？」

どうやら、後から入ってきたポニーテールの女子は飛鳥とこいつが前らし

い。

「こいつは依頼人じゃない」

「そうなの！？ じゃあ、どうして部室に……」

ロングヘアの少女は、きょとんと首を傾げた。

うん。ものすげ可愛い。男が可愛いとと思うポイントを完全に抑えてやがる！

俺が脳内で悶えていると、飛鳥が不敵な笑いを始めた。本当に不敵なんだよ。悪役っぽく、「フフフ……」とか言つてゐるしさ。せつ

かぐの美少女が勿体無い。

「それは……私が拉致つて来たからだつ……！」

「え……！？」

「そつなんだ、拉致られて來たんだ。

「誰も居ない廊下でこいつが一人ぼーっと立つていたところを、花かの音が後ろから殴つて、氣絶したところを私と由里で運んできた」

いい笑顔で話す飛鳥。

暴力つて恐ろしいね。そんな話を、ポーテールを揺らしながら嬉しそうに語るこいつも恐ろしい。

東堂さんはあたふたしている。それが正しい反応だと思うよ。

「もしかして、君は成宮稜君ですか？」

「うん。そうだけど……」

「私は東堂渚。よろしくね」

「私は桐笠飛鳥。よろしくくな」

「よろしく……」

なんだ？一体どうしたつていうんだ？何がよろしくなんだ？

東堂さんが右手を差し出してきた。

反射的にその手を握つた。

「創始者の弟さん、期待しているわ」

『創始者の弟』……まさか……。

「もしかして、こいつて『探偵部』の部屋ですか？」

「うん。そうだけど？」こいは、星ノ坂学園高等部ミステリー研究部

通称『探偵部』よ

にこいつ。

そう言い放ち、満面の笑みをこすらに向けた。

うん。最高の笑顔だよ！ 今はいいけど！

『探偵部』。俺がもっとも関わりたくなかった部活。俺のトラウマの元凶。

最悪の事態を予測しつつも、俺は敢えて尋ねる。

「『よろしく』つていうことはさ、俺、この部活に入るの？」

「そうだよ。だって、お兄さんから連絡があつたもん

兄貴～！ 何してんだ。こつちには何週間も連絡よこさないで。ん？ 飛鳥が俺の背後に回ってきたぞ。足音立てる。コワイ。

口を俺の耳元に近づけてきた。

鳥の濡れ羽色の髪が俺の首筋に触れる。なんかもういい香りが凄い。

東堂さんに聞こえないよ、そつと囁いてきた。

「ここでお前が言うべき返事はイエスだ。ノーと言つてみる。くれぐれも帰り道には気をつけろんだな」

背筋に何ともいえない悪寒が走る。

こいつか！ 真のボスは！

「入るつてさ、こいつ」

「よかつた～。これでこの部も安泰だね」

天使のような笑顔で俺を迎えてくれる。東堂さん、軽く天然入ってるね。人工じゃなきやいいけど。

「一緒に、頑張つていこつね」

これが、全ての始まりの日。最悪の始まりの日。

探偵部のみなさん」をひむ

探偵部入部の次の日 つまり入学式の翌日、教室に入るなりとんでもない光景を見てしまった。

東堂さんと飛鳥と女子一人（花音と由里か）が教室の後ろで話している。

四人とも『探偵部』と書かれた緑色の腕章を付けていた。クラスにいるやつらがみんな見てるぞ。

目立つな、これは。

つて、俺も付けなきゃいけないんじやないのか。
精神的にきついかも。

そういえば、『探偵部』って中等部にもあるということを昨日聞いたんだよな。俺の親友の翔平に訊いてみると、実は学園の変人集団として名が通っているとか。

自分の席に行くには、どうしても教室の後ろの黒板の前を通りなければならぬ。

無視を心に決め、さりげなく四人の後ろを通り、結構気付かないものだな。あとちょっと通り過ぎるぞ。

自分の席に到着し、一息つく。

よし、ミッションコンプリー

「あ、成宮くん！おはよう」「ト出来ませんでした。

でも東堂さんに話しかけられてまだよかつた。ああ、癒される。なんかいいね、甘めだけど澄んだこの声。

「ああ、おはよう成宮」

「あなたが成宮さん？ ようしくな」「ん？ お前が稜？ ようしくな

はい。全員に話しかけられました。

その瞬間、教室の空気が変わった。周りの視線が一斉に集まる。

ねえ、あの四人つて『探偵部』じゃない？

じゃあ、あの男子は？

さあ？ 依頼人か？

ザワザワ。

あちこちからヒソヒソ声が聞こえる。

うわあ、凄い知名度。

これで俺も有名人だね。

じゃないよ！

「あ、そうだ。部長さんからのプレゼントだよ。はー」
例の腕章を渡してくる。

「部長もほかにいるの？」

「やだなあ。私が部長さんだよ。それはそつと、はいこれ。腕章」

「へえ、東堂さんが部長なんだね」

「東堂さんじやなくて、渚つて呼んでね。他人行儀なんて水臭いじ
やないかあ。それはそつと、はい、腕章」

誤魔化しきれませんでした。

うーん。受け取るしかないのか。

渋々と受け取り鞄にしまおうとするや否や、飛鳥が声をかけてき
た。

「ん？ どうした。付けないのか？ 部員は着用義務があるんだぞ」

「校長先生にも許可を取つているのよ」

「まじかっ！ すごいな」

くそ、逃げ道がなくなつた。

緑色の腕章を腕に通す。

うちの学校の制服つて白色だからなあ。色があるだけで目立つん
だよ。

安全ピンを外し、ブレザーの袖に止める。

エナメル質の緑色つて結構目を引くな。

おお。でかでかと『探偵部』と書いてある。

これで依頼もアップだね。じゃねえよ……。

後ろを振り返ると皆がこちらを見ていた。憧れの視線や奇異の視線が織り交じっている。

「へえ、憧れるんだこの腕章……。

「みんな、聞いてっ！」

渚が急に教室に居る皆に向かって大声で呼びかけていた。おつとりしている印象があるけど、その声は大きく張りがあつた。教室がしんとなる。

大きく息を吸い込み、話を続けた。

「今、ここに『探偵部』メンバーが揃いました。学園の平和を守るため、全力で花活動していきます。みなさんよろしくお願ひします『うおおおおお――――!』

歓声が教室を揺らした。

なんだよこの人気……

放課後、俺は部室に来ていた。

しかし昨日拉致られてきた応接室みたいな所とは大分違う。中央に長机があり、まるで会議室のようだ。

だが、棚にはたくさんの中古本が所狭しと並んでいる。ぞうと見たところ、探偵小説や百科事典が大半を占めている。

そういえば『ミステリー研究部』とか言つてたな。おそらく仮の名前だろうが。『探偵部』じゃ承認されなかつたりでもしたのだろう。

でも、腕章にどうぞと『探偵部』って書いてるしな。兄貴の杞憂だったのだろう。

部室に入るなり、俺は椅子に座られた。

「では、まずは自己紹介をしたいと思います。じゃあ、飛鳥からよろしく」

ホワイトボードの前に立つた渚はそう言い、俺の前の席に座る飛

鳥の方を見た。

「私は桐笠飛鳥。つて、みんなもう名前知ってるじゃないか。まあいいや。よろしく」

「次は由亞さんね」

俺の左斜め前の女子 飛鳥の右隣の女子が立ち上がった。

「私は十文字由亞。一年間頑張つていきましたよ。よろしくね」

物腰の良さから『お姉さん』といった感じを受けた。

背は結構高いようだ。ちなみに、渚も飛鳥も背は普通。

髪型も黒のロング。

だが、渚はともかく、飛鳥とは全く違うところがある！

胸だッ！

飛鳥はかなりボリュームが足りない感がある。つて、俺は何を考えているんだーッ！

「次は、花音ちゃんお願ひ」

俺の隣の席の女子が立ち上がった。

第一印象は小柄だ。よくて中学生、もしかしたら小学生にも間違われるかも。

そしてめっちゃラブリー。

ふわふわなブラウンめの髪と、真っ白に透き通つた肌、触れただけで折れてしまいそうなガラス細工のように細く華奢な肢体。全て

が重なり人形のように思えた同時に存在感の希薄さを覚えた

「榊原花音。創始者の弟だからって私は手加減しねえぞ。せいぜいあたし達の足をひっぱんねえようにしな、新人。よろしくな

かに思えた。

二ツと八重歯を出して笑う彼女には、儂さんなんて微塵も感じられない。

おい、腰に手を当てるな。せっかくの可愛らしさがもつたいたいだろ。

「じゃあ、次は成宮くん」

とうとう俺の番が来た。ゆっくりと席から立ち上がる。

「ゆつくつ立つな。もつとじやせつとしりー。」

花音が茶々を入れてくる。ああ、静かに出来ないのか。

「ひり、花音。静かにしろ。」

以外にも、飛鳥が花音のことを見つた。

へえ、結構いいやつかも。

「今からこいつがと

ーヤツ。

「へえ、やうが。と

るんだな」

ーヤツ。

「へえ。と

ーヤツ。

「え? と

キラキラ。

「こひりー。」

まあ、いい。やつてやるよ。男を見せてやるよー。

ふふふ……見てろよ……俺の、勇姿をーー。

「はーい、みんなー! おまたせ! ワタシ、魔法少女プリズム稜たん。悪い子にはワタシの魔法でお仕置きしちゃうぞー! ……」

死亡。

「…………」

「これは飛鳥。」

「…………」

十文字さとも。

「…………」

渚も。

「…………」

花音まで。

誰か、笑ってくれ つ――

「「めん。私がハードル上げ過えた。本当に」「めん」
「謝られるときツイからた、お互い、忘れよつ」

「そうね……みんな、良いかしら？」

「うん。そうしよう」

「ああ。そうだな。花音、わたくしの動画アップして
動画撮んなッ！」

「え？ あたし、パソコン使えないよ？」

「やる気かよ。

「もう！―― そんな」としたらいけないでしょ！ 成面くん、「「め
んね」

「いや、いこよ。では気を取り直して……」
改めて全員を見回す。

「成面稜です。趣味は特にありません。兄が一人いますが旅をして
いて連絡は偶にしか取れません。よろしお願いします」

「フツー。面白くねーぞ」

花音が本当に面白くなさそうな声で言つ。非常にうるせー。
「確かに普通ね。さつきは何だつたの？」
「いや、十文字さん。いつもが素ですか」
「由理。名前で呼んでね。稜くん」

来ました！

高校生離れした色気に俺は瞬殺された。

「じゃあ、新入部員の稜くんも自己紹介をしたことだし、今日やる
ことはもうないね」

さりげなく『稜くん』と呼ぶ渚。少しだキッとした。

「おー、稜。お前まだこの学園来たばかりだよな。私が案内してや
るつか？」

「うふふ。飛鳥。抜け駆けはするいわよ？」

「ぬ、抜け駆けじゃない！ べ、別にこんな魔法少女……」

顔を真っ赤にして抗議する飛鳥。

へえ。こんな表情できるんだ。

あと、俺は魔法少女じゃないからな。

廊下に出る美少女四人の後ろについて俺も部室を出る。

まあ、こんな感じでいいのかな？

厄介ごとが無限に見えるけれど、楽しもうじゃないか。

いまいる状況を、さ。

この後、花音が動画を挙げようと四苦八苦してたので全力で止めにかかりました。

……噛み付かれました。痛かったです。

なんであんなこと言つたんだろうな。

動き出しそうな探偵部

暇だ。

とにかく暇だ。

こんな行動が無茶苦茶な美少女たちと一緒にいて何暇とかほざいてんだよ、だと？

まあ、とりあえず聞いてくれ。

依頼が来ないんだよ

ツー！

平和だと言つたらそれでおしまいだ。依頼がないほうが面倒だとが少なくって済む。

だけどな、やつぱり何か味気なさを感じる。
なんつーか、心にぽつかり穴が開いた感じ。

入部してから一週間たつが、全く依頼が来ない。

毎日が超薄味なんだよ。調味料かけてくれよ。

……いる奴らは濃いけどな。まあ、どちらかといえばスペイ
スだ。

「あら、棟くん何してるのかしら？」

部室で個人持ちのノートパソコンに向かっていると、由里さんが声を掛けってきた。

「えつと、日記ですね。日課なんです」

「へー。そうだわ。お菓子食べる？」

「唐突ですね。食べますよ」

「お茶も入れるから、大きなテーブルの方にいってね

「はい、分かりました」

PCの電源を落としてさっさと指示されたテーブルの方へ行く。
この部屋、無駄に広いんだよな。

会議室ぐらいいの広さがあるんだ。

「コーヒーと紅茶、どちらが良いかしら？」

「紅茶で」

「ミルクとかは？」

「ストレートでいいです」

しばらくすると由里さんが紅茶を持って来てくれた。

「そう言えば、他の皆はどうに言つたんですか？」

「ん？ ちょっとと風紀委員とこざこざがあつてね。はあ……。困つたものよ。ちょっとと大きな行動するだけであいつ等飛んで来るんだもの。融通がきかなければありやしないわ。一度お仕置きが必要ね……」

最後の言葉は聞かなかつたことにしよう。俺はそつ胸に誓つた。そんなことを誓いながら出されたクッキーを口に運ぶ。

「あ、美味しい……。ちょっとオレンジ入れるとこりがいいな」

「それね、飛鳥が作つたのよ」

「へえ、飛鳥が」

「そうよ。あの子、けつこう料理とか得意なの」

口調とか硬くて何となく不器用な印象があつたので、俺としては意外だつた。

「由里さんはよく料理とかするんですか？」

「え、私？ 普段の『』飯はコツクに任せつづいたけど、趣味ではたまにするわね」

「コツク？」

何？ もしかして由里さんリアルお嬢様？

「あ、あの……コツクって……」

「ああ……私の家、結構お金持ちなのよね」

あつさり言わると逆に悪い気がしない。

動搖して渴いた口を潤すために紅茶を一口飲む。

仄かな甘みと苦味の中に何か異質なものを感じた。

「ん……？ 何か入れましたか？」

ほんの少しだけ、ほんの少しだけ紅茶っぽくない味がする。

「これって……」

「どうしたの？」

心配そうに俺の顔を覗き込む由里さん。

「すい……み……ん……やく……です……か?」

「やつぱりだ。

兄貴仕込みの、わけの分からない能力その一。
くそ、こんな所で発揮されるとは。いや、発揮されていない。飲
む前に気付かなければならぬよな。くそつ、だからいつまでたつ
ても中途半端なんだよ。

そして俺の意識は途切れた。

由里覚めるとそこは例の応接室っぽいところだつた。

俺が探偵部に入部するきっかけになった忌々しき部屋。心の傷は
簡単には直らないのだ。

正式には探偵部の事務所らしい。じゃあ、いつもいるのだから
広い部屋は何なんだよ。

「おはよっ、稜。ふふふ、私が仕掛けたのだ！」

「飛鳥、お前の仕業か」

「やつぱりこいつか。

予想通りすぎてため息が出る。

「飛鳥、あなたじやないしょ。『ごめんね稜くん私がやつたのよ』
由里さんか。まあ、飛鳥ならクッキーに混入させられるしな。

「どうだ？ なんか探偵っぽくないか？」

飛鳥が腰に手を当て、大きく笑つてそう言った。
ポニーテールがゆらゆら揺れている。

「それは探偵に事件を解決される側だろ？」

飛鳥つてバカか？

「飛鳥つてバカか？」

「私はバカじやない！」

おつと、思わず口に出でいた。

「確かにね、飛鳥普段バカっぽいからねえ。でも、入学後の試験の成績は学年一位よ」

「マジか！？」

「それに特待生だものね」「え！？ すごい！？」

「因みに、一位は渚ね」

まあ、それは分かる。なにせ「探偵部」の部長だし。

「あ、みんな来てたんだ。早いね」

噂をすれば何とやら。渚が花音ちゃんと見慣れない男子生徒を連れて、事務所に入ってきた。

「渚と、花音ちゃん、それと……誰だ」「ん？ 依頼者だよ

やつと依頼者が来たのか。

「さあ、座つて座つて」

渚が男子生徒に椅子に座るように促した。

「じゃあ、依頼の説明お願ひね

渚から言つんじゃないんだな。

そして、男子生徒は話始めた。

「えつと、テニス部の者で石丸彰孝いしまるあきたかつていいます。あ、一年三組です。探偵部さんに依頼がありましてやつてきました。あ、みなさん一年生ですか？ そうすか。

ええと、実は部長にとある噂がありまして……あの……実は……

部長が小学生と交際しているかも知れないんです。詳しく述べ分からんんですけど、小学生ぐらいの女の子と一緒に手をつないで歩いていたとか、そんな噂がありまして……。

え？ 妹の可能性ですか？ お兄さんはいますが妹はいないので、それはありえないっす。

探偵部さん、隠密に調べてください！ 隠密に

さて、入部一発目の依頼がテニス部部長のロリコン疑惑か。

「大丈夫！私たちに任せて。絶対に真相を確かめてみせるから」

自信満々に言い放った渚。

「あ、情報の漏洩は絶対にないから安心してね」

そして笑顔。

おい、石丸、顔赤くなってるぞ。

まあ、分かるよ。

反則だよな、渚の笑顔は。

その後、契約書などを書いたりし、石丸は事務所を去つ行つた。

「みんないい？ 今年度初めての依頼、頑張るよ！」

俺たち『探偵部』の初依頼が始まつた。

動き出しそうな探偵部（後書き）

お久しぶりです。久々の投稿すみません。まだバトルには入りません。もう少しゆるゆるとせたかったなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3129w/>

でいてくていぶ！

2011年9月24日03時17分発行